

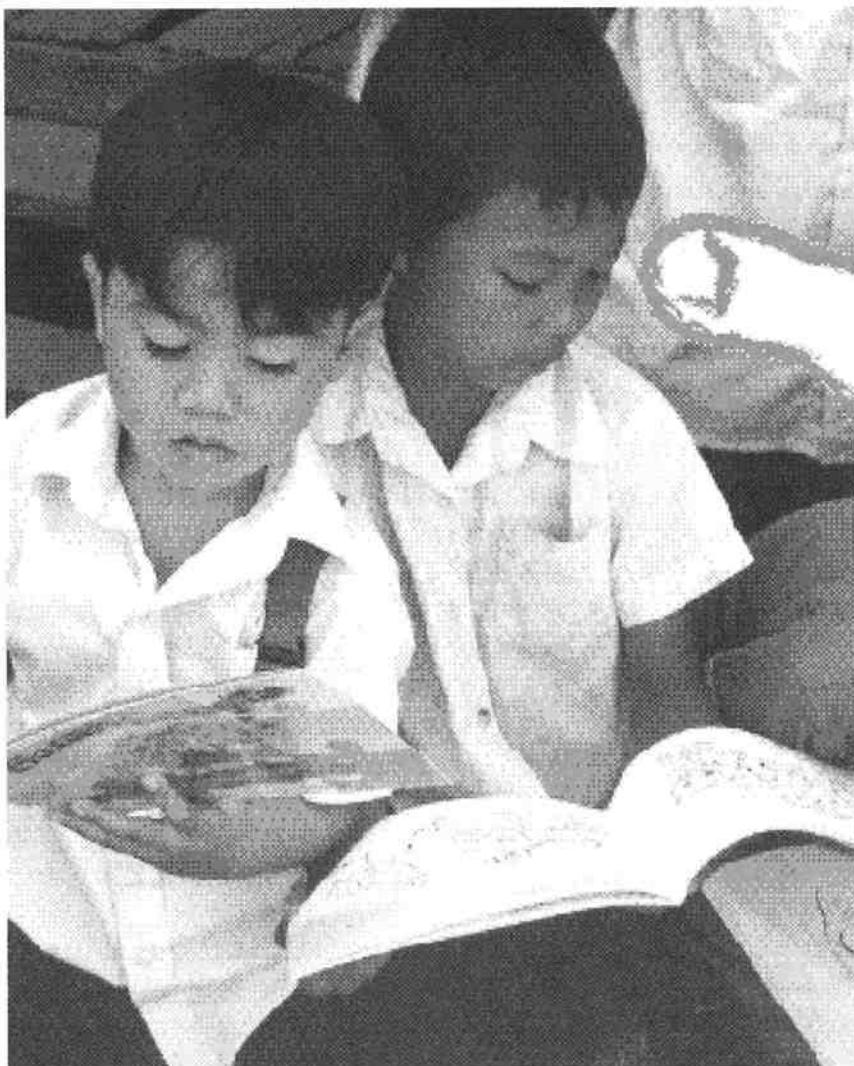
# ラオスのこども通信

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

35号  
2005年12月発行

## 読書推進運動、次のステージへ……2

- 子どもたちと楽器を演奏 / 絵とき辞書の改訂……4  
イベント報告……6  
国内活動……8  
ヴィエンチャン事務所／東京事務所から……10  
MDG とラオスの子どもの取り組み / ラオス便り……11  
活動に参加し支えてくださったみなさん……12



届いたばかりの絵本を読む子どもたち サラワン県にて

## フェーズⅠから フェーズⅡへ

開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援事業」が終了しました。活動を通して、各地で子どもたちが、学校が生き生きと変わっていき、期待以上の成果をあげることができました。

当会は、ラオス人関係者による読書推進運動の自立運営への道のりの中で、このプロジェクトをフェーズⅠと位置付け、年内にはフェーズⅡ「読書推進運動の自主的運営のための拠点構築事業」を開始する予定です。

今後とも変わらぬご支援・ご協力をお願い致します。

特定非営利活動法人ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

## プロジェクト の動き

# サラワン県で図書の補充、 学校での聞き取り調査を行いました



3年にわたり実施してきた「開発パートナー事業」の締めくくりとして、10月9～15日、サラワン県に出張しました。昨年、図書箱・図書袋を配布した136校への本の補充、及び、9校の学校を訪問し聞き取り調査を実施してきました。

サラワン県は、他の地域に比べて2年生や3年生までの小学校が多く、配付対象校の70%が最終学年の5年生まで完備していない4学年以下の学校です。そして、今回の配付対象校の約半数が、教員が1名で複数の学年を教えていました。インタビューのために学校を訪問しても、「今日は先生の家族が病気で、先生が学校に来られないから学校は休み」などというケースもありました。配付対象校の中には、130人の生徒に対し教員がひとりという学校までありました。田舎に行くほど、教員のなり手が少なく、教育局に申請してもなかなか教員が増えないそうです。

聞き取り調査で訪問した「ナーサイニヤイ小学校」でも、生徒が1年～3年までの79人に対し、教員は女性が1名だけの学校でした。大きな教室がひとつだけの校舎。中には黒板が3つあり、それぞれの黒板の前に、机が寄せて並べてありました。学年毎に席が固まつていて、先生は、3つの黒板の間を行ったり来たりしながら教えていました。

ナーサイニヤイ小学校に着いたのは、11時過ぎ。11時半には昼休みに入り、子どもも先生も食事をするために家に帰ってしまうとのことなので、まずは子どもたちへのインタビューを先に行ないました。

最初は恥ずかしそうにしていた子どもたちも、手遊び歌を歌ったり、スタッフが話しかけているうちに、だんだんと緊張が解けて、質問に答えてくれました。「どんな本が好き?」と聞くと「孤児と小さいおばけ」「シナーとユー」など、昔話の題名がいくつかできました。



ナーサイニヤイ小学校の子どもたち

本を読んだ経験が少な

いことに加えて、出版されている図書の種類が少ないため、子どもでも先生でも、好きな本をジャンルではなかなか答えられません。そこで、本の題名を答えてもらうようにしています。「今後、どんな本が読みたい?」という質問に対する回答も、多くが考え込んでしまうか「何でも」と答えます。世の中にはどんな本の種類があるかわからない、どんな本でも読んでみたいというのが正直な気持でしょう。

子どもたちのインタビューが終わると、次は図書箱の状態をチェックします。この学校にはカギのかかる部屋がないため、先生の自宅に保管しているという図書箱を見に行きました。先生の自宅は自転車で10分ぐらいの場所にあります。先生が家族で営んでいる、小さな小さな雑貨屋の一角に図書箱が置いてありました。

図書箱の本の管理状態はとてもよく、貸出の記録も丁寧にノートに記入していました。ただ、記録をみると、貸出は月に数回しかしていないようで、その理由を尋ねると、「箱を学校まで運ぶのは大変なので、中味の本だけ子どもたちに手伝って貰って運んでいるが、毎日は無理なので、毎週火曜日に図書利用の時間を設けている」とのことでした。もう少し多くの貸出はできないかと、雑貨屋を開けている時間に図書箱も開くことを提案しました。小学生のみならず村人にも沢山利用してもらうように宣伝することもアドバイスしました。

先生へのインタビューが終わるころ、村長さんが来て、是非食事を一緒に、と言われました。さっき学校で会った子どもたちが、いろいろな食べ物をもってやってきました。そして、近所の人が数人、台所で集まった食材を調理し始め、さらに待つことしばし。村人ひとりひとりの暖かさを感じる素敵なおもてなしでした。残ったものはお土産として、村人の温かい気持とともに車に積み込み、次の学校へと移動しました。

(赤井朱子)

# 読書推進運動支援事業フェーズⅡへ

## 運動の自立運営と、読書の習慣の定着を目指して

### 開発パートナー事業の内容と成果

JICAとのパートナーシップにより実施してきた開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援」は、12月1日に3年間のプロジェクト期間を終了しました。プロジェクトの内容とこれまでの成果については、この通信で何度かお伝えしてきましたが、ここで振り返ってまとめてみたいと思います。

この事業では「配付対象校の子どもたちが自主的に本を読むようになる」ことを目標として、次の活動を中心に実施しました。

- ・ラオス語の児童書を30,000冊出版する
- ・図書箱・図書袋を1,000校に配付する
- ・既に図書を配付した学校に図書を補充する
- ・図書の配付・補充時に、教員を対象に読書推進セミナーを実施する

当会としては初めての大規模なプロジェクトでしたが、関係者の皆様のご支援・ご指導により、すべての活動を実施し、当初期待した以上の成果をあげることができました。

図書配付と同時に教員を対象にセミナーを実施したこと、図書が学校で有効活用され、90%以上の学校で読書推進活動が実施されていることが確認できました。

図書を配付した学校からは、子どもたちのラオス語の読み書き能力が向上し、積極的になったとの声が数多く聞かれました。図書は子どもたちの知識欲を高め、これまで板書と説明に頼っていた授業を改善し、学校教育の活性化に貢献したと言えるでしょう。一部の学校では、住民の協力を得て、空き教室を改装して図書室にするなど、自らの手で図書室を充実させる動きも出てきました。

学校での図書利用状況の調査を通して、県教育局や教育指導官など地方の人材が、読書推進運動を実質的に担う人材に育ってきたことも、特筆すべきことと言えましょう。

### フェーズⅡへ

「図書を活用する」から、「図書室を育てる」へ  
このように様々な成果を生み出す一方で、いくつかの課題も浮かび上がってきました。破損や紛失などで図書が減ってゆくリスク、読書推進活動を担う先生が退職などで途絶え

るリスク、これらの学校を当会や国立図書館だけではフォローしきれないリスクの存在です。読書推進運動が継続的に実施されるためには、これらの課題に取り組むことが不可欠であると判断し、このプロジェクトの発展形としてのフェーズⅡ「読書推進運動の自主的運営のための拠点構築事業」をJICAの草の根技術協力事業に申請しました。事業は採択内定となり、年内には開始される予定です。

フェーズⅡでは、ラオス人関係者が運動を自主的に担う仕組みを構築していきます。

#### ①継続的活動

図書を増やし、運動を担う人材を増やす。

#### ②発展的活動

##### ・学校から地域へ

地域住民が、学校図書室の維持・発展に協力する仕組みを作る。

##### ・中央から地方へ

教育指導官など地方の人材を運動の担い手とし、中央主導から地方中心にシフトする。

##### ・無償から有償へ

学校や地域で図書を自力で調達し、図書を「無償で受け取るもの」から「対価を支払って得るもの」へと発想を転換することを促す。

読書推進運動はラオス人関係者による自立運営に向けての段階に入ってきており、この状況に対応するシステムを関係機関の中に構築することで、継続的・安定的な図書室運営が可能になると考えます。また、ラオスで図書が不足している状況で、図書のニーズに応える解決策を見出し、図書の流通市場への道を開くことにもつながると期待しています。

ラオスで読書の習慣が定着するには、まだ長い道のりがあります。フェーズⅡへのご理解と変わらぬご支援をお願いします。

(事務局)



(イラスト：勝占紀子／ボランティア)

# 子どもたちと楽器を演奏してきました！

「ラオスのこども」でインターンとして活躍してくれていた学習院女子大学の皆さんと、楽器演奏プロジェクトを行ってきました。



ペアでリコーダーを練習する子どもたち

私たち、学習院女子大学の学生5名は、今夏8月15日から30日までの間、ヴィエンチャンのCEC(子ども教育開発センター)で楽器演奏プロジェクトを行いました。「こんな授業が学校にもほしい！」「楽しいから難しいと思わないよ！」子どもからはこん

なに嬉しい言葉をかけてもらうことができました。半月あまりの短い期間でしたが、私たちは元気いっぱいの子どもたちとたくさん触れ合うことができました。

このプロジェクトは、CECで使われることなく保管されているリコーダーなどの楽器を用いて、ラオスの子どもたちに楽器を演奏し、さらに合奏をすることの楽しさを知ってもらいたいという思いで始められました。

演奏曲は、はじめての子にもやさしい、「きらきらぼし」。8月30日を発表会日とし、それまでの間は1日3時間×3日間で完結する講座を3コマ用意しました。そのうち2コマはリコーダー講座、1コマはピアニカ講座としました。私達は事前に講座運営計画を練り、日本で集めたリコーダー23本、ピアニカ14台、カスタネット5つを持って現地入りしました。

計画では、最初に音楽の基礎を教えようと思っていましたが、子どもたちは、そんな概念よりも、早くリコーダーを吹きたくてうずうずしている様子でした。一番驚いたのは、初日にドレミファソの指使いしか

## 絵とき 辞書 改訂

### 10年ぶりの大幅改訂 ラオスで唯一の 子ども向け辞書



若草色の葉や色とりどりの花のイラストが散りばめられた楽しい表紙。わくわくしてページをめくると、ラオスの動植物、織物をはじめ、世界の名所旧跡など、カラー写真が目に入ります。大人たちも「わあ、きれい！」。10年ぶりに大幅改訂された絵解き辞書は、本文の辞書の内容も充実し、カラー写真による解説の部分も増えて、さながらミニ百科事典のようです。

#### 第1～4版 初めての子ども向け辞書

絵解き辞書は、1995年にラオスでは初めての子ども向け辞書として出版されました。子どもたちが理解しやすいようにイラストを挿入し、ラオスの一般知識や世界の国々についての情報も記載するなど、当時としては画期的な内容でした。その後、1998年までに3回増刷し、累計12,500冊が出版されて、ラオス全国の小学校、中学高等学校、子ども文化センターなどで活用されてきました。

しかし、ラオス全国で小学校、中学高等学校は約9,600校あり、辞書不足の状況はほとんど改善されていないこと、近年ラオスの社会や世界情勢も変化し、より新しい情報が求められていることなどを考え、4年ほど前から改訂版を出版することを検討してきました。

教えていないのにも拘らず、次の日の朝、子どもたちに会うと「きらきらぼし」のメロディーを覚えていて、みんなで練習していたことでした。また、1日3時間の練習時間の中には休憩時間が何度か設けられていきましたが、ほとんどの子が楽器の練習を止めず、休み時間も練習を続けていました。中には、家にまで楽器を持ち帰り、練習している子もいました。

プロジェクトがちょうど折り返し地点を経過した頃、ある男の子が「この曲がやりたい！」と、リクエストをしてきました。それは、映画「タイタニック」のテーマ曲、「My Heart Will Go On」でした。私達は早速、楽譜を作り、子どもと練習を始めました。「きらきらぼし」に比べ難しい曲でしたが、「My Heart Will Go On」は子どもたちの間で大流行になり、最終日の発表会でも演奏されることになったのです。

このように、いつも明るく積極的な子どもたちに支えられ、無事にプロジェクトを終えることができました。私たちは特別な音楽の知識はありませんでした



発表会での全体合奏風景

発表会での全体演奏 この時が一番上手に演奏できた

が、子どもたちに音楽の楽しさを味わってもらえたことは確かだと思います。この経験を通して、ラオスあるいは世界のどこかに、今までちっぽけだと思っていた自分の力を生かせる場所があるということに気づかされました。

(山谷祥子 / インターン)

## 改訂版 豊富な内容、しかし見やすく、

かつたくさん出版

原稿はラオス語、地理、生物など、各分野の専門家が原稿を執筆し、作家のドアンドゥアン・ブンニヤヴォンさんが監修しました。集まった原稿をもとに、構成、レイアウトを大幅に改訂したところ、ページ数は前よりかなり増え、品質のよい紙を使うことを検討したこともあり、出版可能部数はかなり少なくなっていました。

ラオスでは辞書は学校に備え、多くの子どもたちや先生たちが共有して使っています。学校に辞書がほとんど普及していない状況を考えると、できるだけ多くの学校に辞書を配付して不充分な教育環境を改善し、子どもたちの識字能力を向上し、彼らの知識欲に応えるべきではないかという意見が出されました。そこで、「内容の量と質を確保する」、「見やすく使いやすいレイアウトにする」、「印刷部数を増やす」という一見相反する3つの要件を満たすために、検討を重ねていきました。

その結果、文字をわずかに小さくして、ページ割り・レイアウトを大幅に変更し、絵や写真を別ページにまとめて、合計10,520部の印刷部数を確保することができました。

## 辞書の内容

B5サイズ、368ページからなるこの辞書は、通常のことばの説明に加えて、ラオスの一般知識・伝統文化・動植物、世界の国々の一般知識、天体・人体の構造、数学・物理の主要な数式、世界の名所旧跡などが記載とともにイラストや写真で説明が補足されていて、大人にとってもとても魅力的な辞書です。

このように情報量が増え、最新の情報や写真による説明も入って内容も豊富になり、辞書のみならずミニ百科事典としても活用できるものになっています。

辞書は10月中旬までに印刷と製本を完了し、全国各地の学校、子ども文化センター等への配付を開始しました。辞書を授業で活用することで、先生にとっては説明が容易になり、授業の内容も豊かになります。子どもたちにとっても授業の内容がよく理解でき、教科書以外の知識も得ることができ、学校に来る楽しみがふえることでしょう。

ご支援：(財)日本国際協力財団、キヤノン(株)、(財)地球市民財団、富士通ユニティ労働組合、富士通サポートアンドサービス(株)、トータリゼータエンジニアリング(株)

# シンポジウム ラオスの未来と国際協力 ～市民の協力はどうあるべきか～

9月19日に、ラオスで活動をしているNGO、(特活)日本国際ボランティアセンター(JVC)、(特活)地球の木、(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)、(特活)国際協力NGO・IV-JAPANと当会(特活)ラオスのこどもが協力し、シンポジウムが開催されました。

シンポジウムは、福岡アジア文化賞芸術賞受賞のため来日した、ドアンドゥアン・ブンニヤウォンによる講演で始まりました。ラオスの織物の振興と保存、ラオスの文学の研究と普及に貢献しているドアンドゥアンさんは、「伝統文化と現在を語る～織物と女性の自立～」について講演されました。

続くパネルディスカッションでは、ドアンドゥアンさん、ダラー・カンラヤさん(当会ビエンチャン事務所アドバイザー・古文書研究家)、チャンタソン・インタヴォンさん(当会共同代表)をパネリスト、青年海外協力隊第一期生としてラオスに渡った星野昌子さん(JVC特別顧問)をファシリテーターとして、「ラオス人の望む未来像～NGOは何をすべきか」をテーマに議論がなされました。「ラオスの人々が考える理想的な未来を日本人である私たちが知り、一市民としてどんな協力ができるのか。また、ODAがラオスの人々に真に喜ばれるものとなっているのかに焦点を当てたい」というファシリテートで始まったパネルディスカッションは、それぞれの立場からの意見が出され、興味深いものとなりました。

バイラーン(貝葉文献…ラオスの古典であるヤシの

葉の一種に書き付けた古文書)の研究家で子ども文化センターの設立にも関わったダラーさんは、「国づくりに人材づくりは欠かせない。伝統文化を大事にしつつ、もっと本を普及させて、本を読む文化を広げたい。」、織物研究家のドアンドゥアンさんは「私たちの誇りである織物の技術を磨いて、もっと近隣諸国の人々に気に入ってくれたい。ラオスには織物以外にも様々な手工芸品がある。そういうものをいかにラオスの文化として外国と交流していくことができるかが重要である。」、チャンタソンさんは「今の美しい風土を活かして、観光立国にすることを目指したい。」と話されました。

(小澤順一／ボランティア)



シンポジウムの様子

## NGO ネットワーク

9月19日に開催されたシンポジウム「ラオスの未来と国際協力～市民の協力はどうあるべきか～」は、長くラオスで活動を行っているNGO5団体が初めて共同で行いました。

「ラオス・シンポジウム」実行委員会が立ち上げられ、企画から運営、実施まですべて、JVCラオスボランティアチームを中心としたボランティアの連携で行われました。当会からは、ボランティアの小澤と久留の2名が企画段階から参加しました。7月から毎週水曜日にJVCの事務所で企画会議が開かれ、打ち合わせを重ね、当日をむかえました。

会場となった文京区民センターの会議室は定員200名。50～60名集まればよいだろうと考え

ていましたが、蓋を開けてみると、ラオス人7名を含む152名の方が参加者として下さいました。各NGOが精力的に広報した成果であると実感しています。また、ラオス大使もお見えになりました。

今回の共同イベントは、それぞれのNGOのボランティアが垣根を越えて共に活動でき、交流が生まれ、新しい関係性ができました。

また、ラオスや織物等に関心のある方が日本社会に沢山にいることを実感しました。

我々ボランティアも微力ながら、これからもラオスのために、活動を通じて貢献していくことができればと思います。

(小澤順一、久留雅美／ボランティア)

## ラオスから紙芝居の作り手、 ブンルートさんが来日

7月9日の第14 箕面紙芝居コンクールと翌10日の第17回箕面紙芝居まつりに合わせて、ブンルート・シーヴィサイさんが来日しました。1週間という短い滞在の間に、箕面と東京で日本の紙芝居作家から学んだり、作り手のみなさんと交流したり、ラオスでの活動の報告を行いました。

この来日は、大変多くの方のあたたかいお力添えをいただきて実現しました。心から感謝申し上げます。ブンルートさんを箕面へ誘い、貴重な学びと交流の機会を下さった堀田穣さん、ラオスでもお世話になっている紙芝居作家のやべみつのりさんと長野ヒデ子さん、人と本を紡ぐ会の新井せい子さん、特別ワークショップをしてくださった仙台のときわひろみさん、そして以下のみなさん、ご協力ありがとうございました。

箕面市で：紙芝居まつりに全国から参加したみなさん・留学生のラートさんとチョイさん（通訳）

東京で：報告会「紙芝居、メコン川を渡る」ご来場のみなさん・キッコーマン株式会社（会場協力）・留学生のウーンさん（通訳）・蛤谷一通さんと糸美さん（滞在協力）・東村山市いきいき元気塾のみなさん

最後にブンルートさんのコメントを紹介します。「特に子どもたちの作品のすばらしさ、堂々と実演する様子に驚きました。そして、子どもからお年寄りまで実際に幅広い年齢の人が、いろいろな場で紙芝居を楽しんでいることに感動しました。ラオスでは紙芝居は子どものためのものという教育的な意味が大きいですが、将来は日本のように、もっと多くの人が紙芝居を楽しむようになっているといいなと思います。私も、作品づくりを通じて、ラオスにもっと紙芝居を広めたいと思っています。これからもラオスの紙芝居、ラーンチアを応援して下さい。」

ブンルート・シーヴィサイさん

1957年生まれ。93年にユネスコアジア文化センターがラオスで開いた紙芝居セミナーに参加したのが紙芝居との出会い。その後、当会が95年から取り組んでいる絵本・紙芝居づくりセミナーに参加。99年には、ラオスの民話をもとに制作した「さかなのおんがえし」が日本で出版される。ボリカムサイの子ども文化センター館長から、民間機関「参加型開発研修センター」が立ち上げた紙芝居プロジェクトのリーダーに転身。現在は非常勤で当会の出版委員会の事務局を担当。

## 講演会 チャンタソさんの半生

7月2日、青山の東京ウィメンズプラザにて、日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオスチームとの協力で、「僕らのお母さん」チャンタソン・インタヴァンさんの講演会を行いました。関係者も含めると50人近くの方に参加いただきました。



講演では、普段なかなか聞くことのできない、ヴィエンチャンで過ごした幼少時代のお話も聞くことが出来ました。チャンタソンさんは、公立小学校ではなく、フランス系の学校に通うことを希望し、フランス語で授業を受けていました。ところが、中学生になる頃にラオス人としての自我に芽生え、自国の言葉であるラオス語での読み書きを自ら進んで学びました。高校時代には、自分たちがラオスを立て直さなければという意志を持つ若者が多く、同級生ともよく社会問題について議論していたそうです。

しかし、当時のラオスは内戦中で、ヴィエンチャンではあまり感じられませんでしたが、地方では戦闘があり、不発弾が至る所にころがっているという状況でした。そんな中、チャンタソンさんのお祖母さんはラオス国内のラジオ放送と、一般に聴くことが禁じられていた北京からの革命寄りの放送の両方を聴いて吟味することにより、戦況についての正確な情報を入手していたという、そんな進歩的なお祖母さんだったそうです。

参加者からは次のような質問がありました。

Q：日本にいるラオス人の抱える問題は何？

A：両親が共働きで親子のコミュニケーションがとれない。子どもの教育環境がよくない。ラオス語のできるカウンセラーが必要。

Q：日本の市民がラオスにできることは何？

A：ラオスで活動するNGOへの支援や学生への奨学金。

（野崎秀和／ボランティア）



右から2番目がブンルートさん

# 国内の活動

2005年6月～11月

## イベント

ご来場、ご参加、ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。



### ●麻布十番納涼祭り国際バザール

8/19～21 一の橋親水公園（東京都）  
晴天に恵まれた真夏の3日間、今年もラオス人留学生とともに本格的ラオス料理の屋台を出し、ケーンペット（ラオス風ココナッツカレー）、ハーブ風味鶏唐揚げ、ナムワーン（ラオス風冷ぜんざい）、マンゴージュースを販売しました。ボランティア40名、留学生21名が調理室で、屋台で、元気いっぱいに活躍し夏恒例の大イベントを担ってくれました。

### ●グローバルフェスタJAPAN 2005

10/1～2 日比谷公園（東京都）

日本最大の国際協力イベント。一般展示ブースではラオスの教育支援の活動展示と「ラオス語で名前を書いてみよう」体験コーナーを設置し、ラオスの手工芸品を販売、食ブースではラオス料理（ハーブ風味鶏唐揚げとマンゴージュース）の販売を行



## ラオス語絵本プロジェクト

●沖電気グループ「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに送ろう！」 7/2

社員・O Bの皆さん、学習院女子大学インターン、あわせて24名が参加し、60冊の絵本にラオス語翻訳貼りを行いました。翻訳貼りの前にラオスの伝統儀式「バーシー」の体験、スライドショーとチャンタソンのラオス活動報告、紙芝居『サカナちゃんのお留守番』の実演を行い、会場はラオスの雰囲気がいっぱい。絵本は学習院女子大学インターンの皆さん

がラオスに届けて下さいました。



### ●日本サムスン株式会社 「日本サムスン・ボランティアデー」 10/6

ボランティアデーの活動として、半導体装置チームの社員の方々10名が参加し、絵本のラオス語翻訳貼りに取り組んでくださいました。最後のページにご自身のお名前をラオス語で書く作業では、ラオス語の「あいうえお表」を片手に緊張気味。こうして11冊の絵本が出来上がり、ラオスに送られました。



## ボランティア掲示板

### イベントボランティアに参加しました！

グローバルフェスタの初日にボランティアで参加しました。食ブースは、かなりの暑さが手伝ってか、マンゴージュースが飛ぶように売れました。ハーブ風味鶏唐揚げも人気！売り切れました。

会の紹介をする展示ブースでは、ラオス語で自分の名前を書くコーナーを設け、これは学習院女子大の学生さんの尽力で好評でした。また、去年と同様、ボランティアの小熊さんが紙芝居を読むコーナーもあり、じっと聞き入っていた子どもの兄弟が、かわいかつたです。

私はボランティア2年目ですが、イベントの度に新しい発見、出会いがあり、刺激を受けています。

（文・イラスト：勝占紀子／ボランティア）



# 第3回通常総会開催

8月13日、2005年度通常総会を、活動会員26名（うち7名書面表決）、賛助会員5名参加のもと、ライフコミュニケーションズ西馬込にて行いました。

この1年間は、プロジェクトについては、活動経験の蓄積が生かされ、ラオス事務所の能力向上により、比較的順調に推移し、成果をあげることができたこと、また、現地駐在スタッフとの緊密な連携により活動の安定化と質の向上につなげることができたこと、日本での活動においては、ボランティアの方々の積極的な参加により助けられていることなどの説明があり、第3期事業報告、会計報告が承認されました。

監査報告では、監事から、組織運営の弱い点として、自己資金調達、労働条件をあげられました。また、事業の評価をどのように反映させていくのかも課題であるとの指摘がありました。

今回は、会員制度の変更に伴い、定款変更が必要となつたため、詳細に審議し、承認されました。

2005年度の事業計画・収支予算についての報告も行いました。

2004年度は日本評議学会による組織評価を受けたため、同学会の担当者による報告が行われました。総会終了後、参加者の交流会として、「ラオスの子どもたちと、どう共に生きていくのか～これからの10年を考える」というテーマでワークショップが行われました。ラオスや会との関わっている年数、関わり方が異なる方が参加したため、いろいろな意見が出て、お互いに学び合う貴重な機会となりました。

活動報告、会計報告などは別添2004年度年次報告書をご覧下さい。

## 来年度2006年7月から会員制度が変わります

本会は任意団体であった頃は、会員制度、会費制度をとらず、何らかの活動をおこなう人すべてが会員、という基本的な考えでした。その後、法人格取得に際し、積極的に活動を担う活動会員と、活動を支援する賛助会員という、二つの区分をもつ会員制度を導入しました。会員制度を運用する中で、定款に規定がある「活動会員」と、規定がない「ボランティア」とはどこが違うのか、「活動会員」は会の運営にもっと積極的に関わり、役割の一端を担う仕組みの方が分かり易いのではないか、賛助会員は、積極的な意思表示がなくとも、会員と見なすやり方は曖昧であるなど、活動を活性化させるためには、会員制度を明確にしていった方がいいという論議が、このところおきていました。またこれまでも、支援金をいつのタイミングで振り込んだらいいのか分からず、という意見もありました。

そこで、運営会議での数回の話し合いを経て、会の活動に携わる人々を、

- ・「活動会員」：理念を共有し、積極的、継続的に活動及び運営を支えていく人。運営に関する一種の責任を持つ。会員登録は1年間有効、総会での議決権を持つ。  
年会費 学生3000円 一般5000円。
- ・「賛助会員」：資金支援を基本に、会の活動を継続的に応援する人。はつきりした意思表示により、会員登録。総会での議決権はない。年会費 一口 5000円 以上。
- ・「寄付者」：会員登録をしない、一般寄付者。
- ・「ボランティア」：理念を共有し、積極的、継続的に行動を通して活動を支えていく人。定款上の会員概要

念ではなく、ボランティア活動の運営上の概念、というように整理をして考えようという結論に達しました。

この考えに従い、今回の総会で、定款の会員に関する第2章の規定の一部を変更し、会費をともなう会員制度へ変更しました。新しい定款では、入会に当たっては、入会の申込みは意思確認と会費の支払いが必要となります。

以下の変更された定款は、東京都の認証を受けた後に、発効します。また、新しい会員制度の詳細および入会案内は、次号の通信に同封させていただく予定です。

### 第2章 会員

#### （活動会員の入会・退会の手続き）

**第7条** この法人の活動会員になろうとする人は、事務局長が別に定める入会申込書を事務局長に提出し、会費を支払うことにより入会します。

**2項** 事務局長は、前項の申し込みがあったときは、正当な理由がないかぎり、入会を受け入れることとします。

**3項** 活動会員は、事務局長が別に定める退会届を事務局長に提出すれば、自由に退会することができます。

#### （賛助会員の入会・退会の手続き）

**第8条** この法人の賛助会員になろうとする人は、事務局による入会の意思確認と、会費を支払うことにより入会します。

**2項** 事務局長は、前項の申し込みがあったときは、正当な理由がないかぎり、入会を受け入れることとします。

**3項** 賛助会員は、事務局へ退会の意思を伝えれば、自由に退会することができます。

#### （会費）

**第9条** 会員は、理事会が別に定める会費を支払います。

# 事務局より

## ■第15回箕面手づくり紙芝居コンクールで

### ラオスの2作品が入賞

今年は、ラオスから10作品が応募し、一次審査を通過した2作品が実演審査（ビデオ審査）へ。2作品ともボランティアの荒絵里世さんの熱演で7月9日の最終審査に進み、見事受賞しました。

### <一般の部>

優秀賞 ウッティ・シリポーンさん「小僧とお寺のお化け」  
作者はサイヤブリ子ども文化センターで子どもたちに絵画や工作を教えています。お寺に住み着いた恐ろしいお化け（ピー）を通りすがりの小僧さんが退治するお話です。

代演：小川直美（事務局）

### <ジュニアの部>

市長賞 ピンマソン・ピラチャンくん「いたずら雨つぶくん」  
作者はウッティさんの教え子の中学生。空から落ちてきた雨つぶくんが、様々な出会いを経験して川にたどりつき、居場所を見つけるまでの物語です。

代演：我孫子紗樹さん（箕面市の中学生）



ラオスで賞状と記念品を受け取るウッティさん(左)とピンマソンくん(右)

## ■第8回で花のまち可児手づくり絵本大賞で

### ラオスの1作品が入賞

ラオスから6作品が応募し、スーナンタ・カンラヤさんが書いた「カムくんの新しいカバン」が、見事、奨励賞を受賞しました。

小学4年生のカムくんのカバンにまつわるお母さんとカムくんとのやりとりを綴った心温まるお話です。



### ■新人スタッフのあいさつ

皆さん、はじめまして。8月からラオスのこどもで働き始めました猿田由貴江と申します。  
私のラオス歴は、1996年に青年海外協力隊でラオスへ行ったときからですので、もう9年になります。ラオスの子どもを支援するというよりは、私がラオスの人びとに助けてもらったことへの恩返しをしていきたいと思っています。

不慣れで皆様にご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、末永くよろしくお願ひいたします。

## <東京事務所の動き>

### 6/4 活動説明会

6/6 惠泉女子中学高校にてお話（小川）

### 6/12 運営会議

6/23 赤井一時帰国～7/6

### 6/25 理事会

7/2 沖電気でラオス語絵本づくり体験（チャンタソン・小川）

7/2 日本国際ボランティアセンター（JVC）共同勉強会

7/9-10 箕面紙芝居まつりに参加（森・小川）

### 7/10 運営会議

7/12 イベント「紙芝居、メコン川を渡る」

### 7/30 理事会

8/13 2005年度通常総会

8/19-21 麻布十番納涼祭り国際バザールに出演

### 8/27 理事会

9/3 活動説明会

### 9/11 運営会議

9/19 シンポジウム「ラオスの未来と国際協力」の開催

10/12 グローバルフェスタJAPAN 2005に出演

10/6 日本サムソン株式会社でラオス語絵本づくり（小川・猿田）

### 10/15 活動説明会

10/21 國際ソロプチミスト小田原の10月例会に参加  
(チャンタソン・猿田)

### 10/22 理事会

10/29-30 ボランティアフェスタに参加（猿田）

## <ヴィエンチャン事務所の動き>

6/17 シーサタナークOCC活動状況視察

6/25 ノーンセンチャンOCC活動状況視察

6/29 ヴィエンチャン都サントーン郡にて読書推進セミナー実施

7/5-16 教員のための教材制作セミナーの視察

7/6-15 箕面紙芝居コンクール招待及び活動報告会のため来日  
(ブルート)

7/25 サイヤブリ県およびルアンパバーンOCC視察

8/4 SVA/自治労東京ツアービー視察受入

8/46 “ベーブサート”ワークショップ（SVA/OCC局主催）参加

8/11-31 学習院女子大学インターン受入

8/19 じゃっどスタディツアービー來訪・出版委員会

8/23 「うつくしま県民の翼」スタディツアービー來訪

8/30 インターンによるOEC講座 発表会

9/12-26 ダラー・ドアンドゥアン訪日

9/12-17 シエンクワン県出張（HA開設・TTSフォローアップ）

9/22-23 国際ソロプチミスト小田原支援による植樹の実施

10/10-16 サラワン県出張（図書補充セミナー・モニタリング）

10/24-26 ルアンナムター県出張（HA開設・TTSフォローアップ）

10/27-29 (財)国際開発救援財団TTC視察に同行

※HA=学校図書室（ハックアーン） TTS=教員養成校

CCC=子ども文化センター OEC=子ども教育開発センター

# 国連と世界の国々が子どもたちに約束したこと 「ラオスのこども」とミレニアム開発目標

世界には、学校に行けない子どもが1億2,100万人いるといわれています。また、教材の不足や先生の教える力が不十分など教育の中味に改善の必要がある学校は、とても多くあります。

2000年の国連総会で、貧困削減をめざす「ミレニアム開発目標」が採択されました。8つの目標を立て、その中に「2015年までに、すべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」があります。

「みんなが学校に行けるようになる」ため、様々な国、機関、NGOによる学校建設などの援助が進められていますが、ラオスも他の国も、いったんは入学してもやがて行かなくなる子が少なくありません。この問題の解決が教育の普及に欠かせないです。

## ■行きたい学校、先生の意欲

様々な団体が様々な支援を行う中で、ラオスのこどもは読書の普及などを通じた、教育の質の向上をめざして活動しています。

子どもが学校をやめる理由は、遠い、家の手伝いがある、などがいわれてきました。しかし子どもにとって魅力的なところにし、先生にとって意欲的に教育に臨めるようにすることが大切です。

ラオスのこどもは、学校に図書室を整備し、先生に図書指導の研修を行い、地方の教育行政官とともに学校を回り、同時に、本そのものを増やすために、作家育成の講習会を開き、作家発掘の作品コンクールを行っています。

そうした結果、子どもは本を楽しみに学校に来て、先生も活発な図書活動に誇りを感じているといった姿が、様々な現場で見られるようになりました。

さらに中央政府に対し、小学校で読書を授業時間に組み込み、教員養成学校で読書指導の科目を設けるよう働きかけ、それが徐々に受け入れられています。こうして、個々の教育現場での成果の普及に努め、ミレニアム開発目標達成の一翼を担っています。

(森透)

ラオス便り

## きれいな服に支援はいらない？

最近、ヴィエンチャンでCECを訪問した人から、「きれいな洋服を着た子どもが多いですね」という感想をよく耳にします。確かに、街で物乞いをしている子どもたちに比べたら、センターに来ている子たちは、きれいな洋服をきています。彼らは、いわゆる最貧困層の家庭の子どもたちではありません。では、かといって、経済的にとても裕福かというと、そういうわけでもありません。

「きれいな洋服」という感想を述べた人の趣旨はそれぞれ全く違うと思いますが、「ボロボロの洋服の子どもたち」は、やはり援助のイメージなのではないでしょうか。しかし、今のラオスにおいて、子どもが本や情操教育へアクセスできる量は、洋服のきれいさ=経済力とは、必ずしも一致しないのではないかと私は感じます。

「援助」をする時、より困難な状況にある人々を対象としますし、経済力は困難さを図る大きな手段のひとつです。例えば、ラオス国内でみると「援助の対象地域」になりやすい地域は、首都から離れていて少数民族が多いところです。

しかし、子どもと本という視点でみれば、首都

ヴィエンチャンに住んでいるからといって、日常的に本に触れる機会があるかというと、必ずしもそうではありません。学校に図書室設置の義務がないため、学校内に教科書以外の図書がないのは、ヴィエンチャンでも地方でもほとんど変わらない状況です。

学校に図書箱が配られ始めて15年になりますが、当初、図書箱の配付は地方ばかりでした。一部の個人支援を除き、ヴィエンチャンで、まとまった数の図書箱がセミナーを実施しながら配付されたのは98年以降ですし、その数も多くはありません。

人口の1割が住む首都ヴィエンチャン。全小学校数の18%が集中しています。図書箱が配られた学校数は、ラオス全体では、全学校数の半数を超えますが、ヴィエンチャンでは4分の1程度にすぎません。

現在のヴィエンチャンでは、どのような状況の子どもにあっても、図書箱やCECという場が、図書に触れられる数少ない機会です。未来を自ら切り拓く入口となって欲しいと願っています。

(赤井朱子)